|  |  |
| --- | --- |
|  | 小千谷旅する案内帳「千の谷の物語と雅色の郷　小千谷」 |

**小千谷港**

ガイド案内

* 信濃川の舟運で隆盛を極めた川港です
* 船改め番所があり、旅人、武器、穀物などの出入りの検査が行なわれました。
* 数十隻の船が出入りし、荷揚場（にあげば）では、丁持（ちょうもち＝荷揚げ人足）が忙しく立ち働き、丁持小屋や川端茶屋が沢山並び、「団子はいらんかえー」などと売り子の声が、朝から晩まで賑やかに絶え間がなかったといいます。明治初めで丁持10軒、船頭・舟子が35軒、宿屋・飛脚、米蔵などがずらりと並び、郷宿（陣屋に用が有る人が泊り、あるじは陣屋との煩わしい手続きをする任務をもつ）が20軒あったといいます。料亭、置屋もあって、あでやかでした。昭和初期でも芸妓が50人以上いたということです。

エピソード

* 小千谷発祥の地といわれ、信濃川が越後平野に入る谷口の蓮華谷に清水を求めて住んだ人たちが、三国街道が整備され、小千谷縮の爆発的な繁栄や大きな陣屋がおかれた事などで、水陸交通の要所として　川端、川岸町、下タ町、天竺町など周辺は繁盛を極めました。
* 長岡で荷を積み替えられた船は川の流れをさか上り、信濃川を上る十日町舟と魚野川へ入る六日町舟とに分かれます。上り荷には酒、味噌米、塩などの生活物資､長岡、新潟方面にいく下り舟には米や大豆、コロなどの農作物や生産物、それに混じって三国街道に渡る旅人やちぢみ商人などが行き来しました。
* 船は人力で引き上げます。箸ほどの細い苧綱で百数十ｍの長さがあります。川岸から引き上げます。大舟は8～10人必要でした。小千谷から上流は急流や断崖、浅瀬ありで難所です。岸がない所は通りやすい側をあっちに行ったり，こっちにきたり、時には川に入って引きます。岩の割れ目や木の枝などツッかかりを利用してふんばります。慎地のはばなどの絶壁では崖に足型に穴を掘って足場にします。今でも残っているようです。
* 正月11日が初仕事で、真冬でも裸で川に入る過酷な作業でした。朝は５時頃から冬場は７時ごろ。昼過ぎには終わります。
* 服装は『濡れる事を恐れず、濡らさない事』だそうで、褌ひとつかつけないことも。冬は膝上の綿入れの山着物一枚で腰までたくし上げて。下は裸です。過酷な重労働でした。舟引きは『宵越しのお金は持たない』という人も多く、十日町に上るにも数日を要したので、港が繁盛するのは容易に想像できます。
* 江戸の文化は埼玉、群馬から三国峠を越え､魚野川沿いに小千谷に至り、信州善光寺の文化は千曲川に乗って十日町を経由して届きました。逆に小千谷のすぐれた仏壇工芸の技術が飯山に届きました。京、大阪の上方（かみがた）文化は日本海から新潟港に入り、信濃川をさか上って入ってきました。
* 旭橋が明治20年に豪商・西脇家と久保田家の二軒の資金でかけられました。木造で冬掘町の杉の木が32本使われました。当初有料。
* 信濃川は昔はもっと東側を流れていて、川原が広かったそうです。旭橋の下流付近まで川原が続き、馬市も立ったといいます。慎地（しんち）のはばも人が通れ、崖の下を山本まで行けたといいます。
* 『入り鉄砲、出女（でおんな）』役人への賄賂によって、入ってくる銃砲類や貧困で売られていく女の人には目こぼしされた
* 金毘羅宮を祀り、古来、舟運、漁、豊穣を祈願してまいりました。現在、木彫りで朱塗りのご神体は元町会館二階に遷座され、建物は照専寺稲荷の社殿となっています。祭りは６月９日。元町の人々は信心深く、２ヶ月に１回、朝、神事を行い、りっぱな魚を神前にお供えし、氏子達は夕方また集まり、料理人の多い町ならではの神技で作られた御造りの会席料理で、厳かに腹の底から身を清めます。ご神体の拝観は希望により可能、お賽銭なりのご利益はありそうです。

メモ